

Can I Start An Item
Collecting Quest Here?



採集クエスト ありますか?

Fukuba Mitsutsuki
福場三築

Illustration 三登いつき

ヒギル

謎めいた放浪者。
魔剣を追い大陸を横断してきた。
戦闘能力がずば抜けて高い。

クルリ

魔族の奴隷少女。
廃棄される寸前にライルと出会う。
スキル玉を吸収し成長していく。

グロテスク

多くの命を糧に生まれた魔剣。
幼女の姿に擬人化する。
触れた者には呪いが降りかかる。

ライル

本編の主人公。
三度の飯より採集が好き。
所有スキルは「採集」
ただひとつ！

登場人物紹介

MAIN CHARACTERS

その少年の名はライル。生粋きっすいの採集馬鹿である。

ライルは生きてきた十五年の歳月を、ほとんど採集に費つやしていた。だが、そんな彼も孤独が好きなわけではない。

「ああ……仲間が欲しい」

昨日の『フィヴァレスの儀』の後から、どうも村のみんなに避けられているようだ——ライルはそう感じていた。

いつもなら一緒に来てくれる幼馴染おとななじみのレイトも、「二度と俺に関わるな」と言ってきた。そのため今は、岩いの如く地面を離れようとしない薬草と、長時間一人で格闘している。ウノーラ大陸の南端に位置するここラーティア王国も、今はまだ肌寒い。

このまま諦めるのは癪しやくだが、寒さに当てられ如何いかせん体が持たなかった。

「俺は採集スキルひとつで満足なんだがなあ」

フィヴァレスの儀とは、十五歳の成人式を迎えた人間が、才能の神フィヴァレスから才能——通称スキルを授けられる儀式である。

昨日、十三個のスキルを授かった幼馴染レイトの次に、ライルも教会で儀式を受けた。

しかし授かったのは、ノーマルスキルである『採集』ひとつだけだった。

どんな人間でも最低五つはスキルを授かるはずなのに、たったひとつのライルは異端そのもの。

一日で噂は広まり、村では忌み子だとか悪魔が取り憑いているだとか、言われ放題であった。

「ぐぬぬぬ……」

ライルはそれを思い出しながら、力いっぱい薬草を引っ張った。

周囲との温度差を肌で感じる。人々はライルが出来損ないだと嫌な顔をしていたにもかかわらず、彼は与えられたスキルを見て大喜びしていたのだ。

「うおっしやあ!!」

頑固な薬草を引っ抜き、雄叫びを上げる。反動で後ろに倒れ、盛大に土を被ってしまうがお構いなし。ライルは立ち上がり意気揚々と言った。

「やーい、どうだ見たか! 採集スキルを持った俺に、採れない物などないんだぞ!」

スキルがひとつしかなく関係ない。

そのたったひとつが採集スキルであるならば、ライルは百のスキルを得たも同然なのだ。

何せ三度の飯より採集が好きなのだから――。



採集の途中でオカメイノシシの牙を三本拾い、ホクホク顔のライルは、アキシスの村にある冒険者ギルドへ足早に向かった。

「どうもー、依頼達成したんで持ってきましたー」

十三歳で冒険者ギルドに登録して以来、毎日のように通っている。もちろんギルドが幹旋してくれる採集クエストを受けるためだ。

今では顔馴染も出来、こうしてギルドに入れば数人の冒険者が「ようライル、今日も採集クエストか?」と笑顔で返してくれるはずだった。

しかし今日はとても反応が悪い。やはりフィヴァレスの儀が原因なのだろう。

「何だか冷めてますね、不景気ですか? まあ良いや。はい、依頼のヒヤク草です。ついでにオカメイノシシの牙三本も拾ったんで、これも精算してください」

麻袋に入った中央が黒ずんだ草と、長さが疎らな牙を三本、テーブルに置く。

受付の女性は眉をひそめながらもそれらを受け取り、対価として銅貨二十五枚を差し出した。

ありがとうございますと言いつつ、ライルはそれらを受け取り足早にギルドを出た。

そして家へと向かいながら、嘆息混じりに呟く。

「うーん、やっぱり態度が変わるなあ。採集の何が悪いんだよ全く。採集効率は上がるし、状態は良くなるし、知識も入ってくる。最高じゃあないか!」

ノーマルスキル——採集。

採集作業が効率的になる。採集物の状態が非常に良くなる。採集物の概要が何となく理解でき、練度が上がると詳しい情報まで分かる。

幼い頃から熱望していたスキルが手に入り上機嫌のライルだが、周りの反応は少し^{こた}応えた。

「俺が良いって言ってんだから良くない？　ひとつだろうがふたつだろうが他人には関係ないっつーの。レイトまで俺を避けやがって。悪口は構わないけど、避けられるのは嫌なんだよ」

レイトの奴め薄情だ、と大声で叫び、少しばかり鬱憤^{うつげん}を晴らす。

ライルは自宅に着くと、落ち着くために簡素なベッドに寝転んだ。

ここは元は母親の寝室だった。母はライルが十三歳になったある日、病気で死んでしまった。

父親なんてライルが生まれた直後に死んでしまっていた。

だからこそ冒険者ギルドに登録し、生活のために毎日採集クエストを受けているのだ。

「それにしてもおかしいな、このスキル」

そう言ってライルは目を閉じ集中した。

浮かんでくるのはスキル『採集』の情報。こんなことができるだなんて教会は説明してくれなかった、と思いつつ、さらに意識を集中させてみる。

すると『採集ポイント』『採集倉庫』『採集図鑑』の項目が現れた。

ノーマルスキル『採集』には、採集図鑑とか、採集ポイント、採集倉庫だなんて性能も、ましてやこんな文字が浮かんでくるだなんて、なかったはずなのだ。

「どういことだろう……」

試しに採集ポイントの方に意識を集中させてみると、紙がめくられるような感覚がして、『採集ポイント——27』と浮かぶ。

「スキル図鑑で読んだのと違う……」

一度教会でスキル図鑑を読ませてもらった時に見た『採集』の項目には、こんなことは一切書かれていなかった。

「まさか、ユニークスキル……とか？」

スキルには、ノーマルスキル、レアスキル、ユニークスキルの三種類がある。

ノーマルスキルとは、通常のスキル『採集』のような普遍的なもの。多くの人はこのノーマルスキルでスキル欄が埋まっている。

レアスキルはノーマルスキルよりも希少価値が高い。中には性能が低かったり、運が悪くなったりするものもあるが、比較的高性能なスキルが多い。

ユニークスキルとは唯一無二のスキルで、その人以外は誰も持っておらず希少価値が高い。そもそもユニークスキルを持っている人自体、かなり少ないのだ。

「まさかなあ」

スキル名は才能の神フィヴァレスが決めているというのが、ノーマルスキルとユニークスキルの名前が同じ、なんてことがあるのだろうか。

ライルは今一度目を閉じ、次なる項目『採集倉庫』に集中してみた。

またぞろ紙をめくるような感覚とともに現れたのは、ずらりと並んだ四角のイメージだった。何これ、と思いながらも脳内に流れてくる奇妙な情報に思わず声を上げる。

「ええ？」

採集ポイントの時には特に何も感じなかったにもかかわらず、この倉庫を開くと丁寧な解説が流れてきた。要約すると「採集したものを保存しておけますよ」とのこと。

「保存って……でもどうやって」

そう思うと、「手に持って念じれば良いんですよ。出す時も同じです」と食い気味で脳内解説された。

試しに床に落ちていた砂をひとつまみしてみた。念じてみたが、何も起きない。

首を傾げていると「今のあなたでは採集できません」みたいなことを、物凄く堅苦しい言葉で言われた。古語かこれは。

ライルは仕方なくもう一度山へ行き、剣山のように生えているヒヤク草を一本採ってみる。

ヒヤク草は食べると自然治癒能力を高める効果がある。

ただしとても苦いため、口に入れようものならものの数秒で嘔吐してしまう。だから基本的に煎

じて飲む。煎しても苦いものは苦いが。

「念じる、ねえ……」

未だ半信半疑のライルは、何だか心の声に踊らされている自分に羞恥心を感じながら、覚悟を決めて強く念じてみる。

すると不思議なことに、今の今まで手の上にあったヒヤク草が消えた。

「おうマジか」

素でそんな言葉を発しながら、採集倉庫を開いてみる。

なんとそこには、羅列された長方形のひとつに『ヒヤク草1』という文字が刻まれていた。

奇跡のような現象に興奮したライルは、すかさず仕舞ったヒヤク草を取り出そうと念じてみる。さすれば先ほどと同じ感覚が手に伝わり、手のひらにヒヤク草が一本現れたのだった。

「すげえ！」

ライルの声が山の中で反響した。

いやしかしと冷静になるライル。もう一度手のひらのヒヤク草を収納し、再び手の上に出す。やはり見間違いはない。見間違いはないが……。

「なんか、手からうんこ出してるみたいな感覚だな」
最低である。



ラーティア王国南部にあるウインスター伯爵領。その南東に位置するアキシスの村。

東には森や山が広がり、南には湖がある自然豊かな村だ。

ライルはその周辺で、授かったスキル『採集』が、ノーマルスキルではなくユニークスキルであることを確認する実験を行っていた。

東の森の中で、手にヒヤク草を握ったまま棒立ちになり、意識を次なる項目『採集図鑑』に移す。すると頭の中に現れたのは、何も書かれていない本のようなもの。ぱらぱらとめくると、『植物』という項目が出てくる。

もう一頁めくると、ぽつりと『ヒヤク草』という文字があつた。すぐさまその単語に意識を向ける。

植物——ヒヤク草

剣山のように群生している薬草。葉の中央が黒ずんでいる。

経口摂取すると自然治癒能力が上がる。そのまま食べると苦すぎて嘔吐することがほとんど。

生でも一応効果はある。煎じると苦味が緩和される。

獲得採集ポイント——1

生成に必要な採集ポイント——3

予想はしていたが、読んで字の如く図鑑らしい。

ヒヤク草とオカメイノシシしか載っていないところを見ると、スキル取得前に採った山菜や薬草は登録されていないらしい。スキルの発現後からカウントされているようだ。

しかし後半のポイントとは？

察しは付いているので、採集ポイントの項目を見てみる。先程見た時は27ポイントだったのに対し、今は1ポイント増えて28ポイントになっている。図鑑通りである。

試しに手に持ったヒヤク草を落としてもう一度拾ってみる。が、ポイントは増えていなかった。確認のため、そこらに生えているヒヤク草を三本引き抜いてみる。

するとポイントは31に増えていた。その三本を落として拾ってみるがやはり増えない。

どうやら一度拾った時点でポイントが加算され、それ以降は同じ物では増えないらしい。

次に、生成に必要な採集ポイントというとても気になる文言もんごんを見る。

生成と念じてみると、ヒヤク草がぽんと手に現れた。相変わらず排便のような感覚である。

採集ポイントを確認してみると、28ポイントに減っていた。

「なるほど……」

要するにだ、基本的にこのスキルはノーマルスキルの『採集』となんら変わらない性能を持つて

いて、追加で以下の効果を得られるというわけだ。

採集すると『採集図鑑』に登録される。

同時に『採集ポイント』が溜まる。同じ物を二度拾っても溜まるのは一回目だけ。

さらに採集したものは『採集倉庫』に入れることが可能。容量の限界は今のところ不明。

そして『採集図鑑』に登録されたものは『採集ポイント』を消費して、生成することが可能。ポイントは獲得採集ポイントの三倍？

最後に、生成する時と倉庫から出す時は手からうんこをしている感覚がある。

「採集スキルだけでも嬉しいのに、こんなとんでもスキルを手に入れてしまうなんて……！」

ライルは嬉しくなり、片っ端からヒヤク草を引き抜いていく。乱雑に抜いたつもりだったのに、やつぱり状態が良い。流石は採集スキルである。

引き抜いたヒヤク草は倉庫に仕舞う。

倉庫には合計三十五本のヒヤク草が溜まり、採集ポイントは58ポイントとなった。



この世界にはふたつの大陸があり、それぞれウノーラ大陸、サノーレ大陸と名付けられている。そしてウノーラとサノーレに挟まれるようにして存在すると言われているのが、神々の土地ズ

ガイ。

ライルの夢は、この三つの地それぞれに生えているとされる、三種の花を採集することだった。

ウノーラの中心に生えた創造の花『ツク』。

サノーレの中心に生えた論理の花『ロジク』。

ズガイの中心に生えた天頂の花『ツムジク』。

この三本は、それぞれ神の起こす奇跡のような力を持つとされる。

人々はこれらに魅了され、幾千年もの間追い求めている。しかし未だ見つけた者はいない。

今では誰もがただの夢物語だと諦めている。何せズガイは見つかってさえないのだ。

しかしライルは幼い頃からその存在を信じ、一度も疑わなかった。

友人だったレイトにすら馬鹿にされ、あるはずがないと否定された。それでも諦めなかった。

その夢を、本当に叶えられる可能性が出てきたのだ。

ユニークスキル『採集』。これはライルに光をもたらしただ。

現在ライルはスイネンという桃色の花を、とある墓に供えて目を閉じている。

母と父の墓だ。

スイネンとは死者を弔う花とされ、その花が放つ特徴的な甘い香りは、死者を浄化してくれると言われている。

「行ってくるよ。母さん、父さん」

ライルは目を開け、墓に微笑みかけた。
持ち物と金を確認し、踵を返して墓の前から立ち去る。
この日、一人の少年が村を発った。誰もが迷信だと一笑に付す夢を、いつか叶えるために。
「やっぱ、仲間が欲しいな。お手伝いさんとか」
そう呟く表情は緊張していて、でも口角が上がっていて、どこか楽しそうだった。
鞆をぎゅっと抱きしめて、スキップ混じりに村の門を潜る。まだ冷たい春の風に吹かれながら。



父親が冒険者時代に使っていた剣を携えて、舗装もされていない道をライルは歩いていた。
この世界には、人類に害を為す『魔物』が多く存在する。

しかしこの近辺にはいないようで、護身用につけてきた剣が役に立つこともなく二日間旅は続き、目指す街が目の前まで迫っていた。

「あれがヘイヌか……」

ヘイヌの街はウインスター伯爵領の北東部に位置する山の麓にあり、この山を越えるとウインスター伯爵領ではなくなる。

なお少しばかり南西に向かうと、ウインスター伯爵邸のあるウインスの街がある。

ヘイヌにはアキシスより大きな冒険者ギルドがあり、依頼も豊富で、お金を稼ぐにはもってこの場所である。ついでに、もうひとつの目的もあった。

「この金で足りるかなあ。足りないよなあ」

それは、採集スキルを持った奴隷を買うことだった。

たとえ新しい仲間を募ったところで、スキルがひとつだとバレてしまえば終わりだ。

故に、たとえスキルのことを知られたとしても反抗されない、逃げられない奴隷が好ましい。

ちなみに、ライルの現在の所持金は9620レス。銀貨九枚と銅貨六十二枚である。この「レス」というのがお金の単位になる。

「まずは稼ぐしかないな」

街に入る際に銀貨二枚という痛い出費をして、滞在するための手続きを終えたライルは、自身の村より圧倒的に栄えたヘイヌの街を見て、思わず感嘆の声を漏らした。

建ち並ぶ建物と、どこを向いても一人二人は必ず視界に入る人口密度に、驚かざるを得ない。

しかしこうしちやいられないと歩き出し、早速ギルドへ向かった。

「どうも……」

ギルドの前に着いたライルは恐る恐る扉を開け、中の様子を窺う。

一瞬数人の視線がこちらを向いたが、すぐに会話へと戻った。

ライルはキョロキョロとギルド内を見回し、村のギルドとの違いにまたも驚きながら、受付へ向

かった。

カウンターの前に立ったライルは、下級冒険者用のギルドカードを取り出し、受付に提示する。冒険者には階級があり、初級、下級、中級、上級、超級、極級の六段階に分かれる。

最初は誰もが初級で、受けたクエストの質や当人の力量などで上下するのだ。

ライルは十三歳から冒険者を始めたので、初級は卒業している。しかし採集クエストしか受けていないので下級止まりである。

ライルは受付がギルドカードを確認すると、こう質問した。

「ここに採集クエストはありますか？」



ライルはクエストボードを眺めながら、ささやかな羞恥に耐えていた。

どうやらこのギルドではクエストボードに貼られた依頼を自分で選び、受付に持っていって依頼を受けるらしい。

先程「ここに採集クエストはありますか？」と聞いたら、「は？」という顔をされ、「何を仰ってるんですか？」と言われた。

すぐさまクエストボード前に案内されたが、しばらく恥ずかしい気持ちに堪えていた。

周りの冒険者が「おいあいつ随分悩んでるな」と囁き始めた頃に、ようやく適当な採集クエストの依頼書を剥ぎ取る。

依頼内容は『マズイの実三個の納品』。

依頼料は銀貨三枚と高めだ。そのクエスト用紙を見ると、受付嬢は怪訝そうな顔をした。

「おい、あの男馬鹿だぜ。マズイの実の採集クエストだってよ……」

「ハハ、三つもかよ。無理無理。この辺のはもうとつくに採り尽くされてるさ」

「金に目が眩んだんだろ……って、報酬はたったの3000レスかよ。普通一個1万はするもんだぜ。なんだよ、何も知らないただの馬鹿か……」

周りの冒険者達も何かひそひそと話している。

ライルも雰囲気くらいは感じることができたので、眉をひそめながらクエストを受けた。

「採集クエストで3000レスか……」

受付を済ませ、依頼書を確認しながら北の山へ向かう。

北の山の森は深く、湿度が高い。

「ここならタキの木やウルオイ草もありそうだな……」

呟きながら、マズイの実を探す。

マズイの実とは、壺のような形をした赤い果実である。上下の先端は黄色く、中は白く、種が五つから七つほど入っている。

食べると酸味と甘味のバランスが良く、とても美味しい。

通常マズイの木一本に対し、二個か三個しか実をつけない。ひとつしか実がついていないということもしばしばある。

人工で育てるのは不可能と言われる植物で、天然の木を探すしか手に入れる手段がない。

「たった三つで3000レスももらえるわけだ……」

適当にそこらの草花を採集しながら、マズイの木を探しているのだが、全く見つからない。

正確には一本見つけたのだが、実が付いていなかった。

西国には群生していると聞くので買えば良いのだが、かなり高かった気がする。

おそらく依頼主はケチって冒険者ギルドに格安で依頼したのだろう。格安とはいえ一個で銀貨一枚もするが。

「ん？ あれは……」

水の流れる心地よい音が聞こえたと思えば、近くを川が流れていた。

近付いてみると、なんと幅の広い川で、近くにはタキの木が何本か生えていた。

「やっぱりあったな、タキの木！」

タキの木とは水辺によく生えている木で、幹にも枝にもたつぷりと水分が詰まっており、枝を切つてしばらく待つと水が出てくる。

水辺以外でも発見され、貴重な水分補給の手段として重宝ちゆうぼうされていた。

「そしてタキの木があるということ……」

タキの木周辺の地面を探すと、お目当ての物があつた。

しっかり根元から採集したのはウルオイ草。タキの木の根元によく生えている草で、そのほとんどが水分で出来ている。

口を含めば飲んでいいのか食べていいのか分からなくなるくらいで、天然の水筒にもなった。

「いやあ、このぷくらした感じが最高に可愛いな」

ウルオイ草を口を含みながら、持参した鉋なたでタキの木の枝を数本切り落とし、即座に採集倉庫に仕舞う。本来ならその場で垂れてくる水を啜すするのが普通だが、スキルの特権だ。

試したところ、倉庫内では時間が経過しないらしい。

根元に生えているウルオイ草もいくつか採集し、同じように倉庫に仕舞った。

「おお、気付けば採集図鑑もちよつと埋まってるし、ポイントも増えたな」

採集ポイントは173ポイント溜まっていた。

道中なんやかんや拾っていたのが功を奏したのだろう。とはいっても、採集したものしか生成できないので、ポイントはまだ役に立たなそうだが。

何に使おうかと考えながら、森を散策する。

そうしているうちに、またもマズイの木が目に残まった。しかし実はひとつもついていない。落胆しつつ、最後の希望として周辺に実が落ちていないか探してみる。

「落ちてないか……」

ぐるりと一周して、どこにも無いと諦めかけたその時、目に入ったのは黒い塊^{かたまり}。もしやと思い近づいてみると、それは腐ったマズイの実だった。

表面に黒い斑点^{はんてん}がいくつも浮かび、萎^{しお}れてしまつて、強烈な甘い香りを放っている。「これじゃ流石に収穫^{しゆかく}とは言えないよな……」

そうばやきながら、人差し指と親指で腐った実をつまむライル。

いや待てよ、と悶^{もい}いたこの時の自分を褒めてやりたい。

「増やせんじゃね……?」

思い立ったが吉日。

ライルはすぐさま採集図鑑を開き、植物の一覧からマズイの実の項目を探した。

ヒヤク草でもなければウルオイ草でもタキの木でもなく……あった。『マズイの木』の項目。

開くとそこには、木とともに実の説明まで載っており、救いのような一文が書かれてあった。

獲得採集ポイント——20

生成に必要な採集ポイント——60

どうやら腐つていても実は実らしい。採集にカウントされていた。

ポイントもちゃっかり加算されており、現在のポイントは193。

三つ生成して180なので、ぎりぎり足りる。

ライルは意気揚々と三つ生成し、採集倉庫に仕舞った。

採集倉庫には採集した物しか入れられないと思つていたが、昨日うっかり生成したヒヤク草を採集倉庫に入れてしまったことで、生成したものでも同じく仕舞えると分かった。

拾うことと採集することの違いがよく分からないが、今は気にしないでおう。

ライルは顔面に笑顔を貼り付けて、ハイヌの街に戻った。

道中「手からマズイの実を出すのはまずいよな」と思い、背負っている鞆に入れておいた。

ついでに採集した薬草やキノコもいくつか、精算用に鞆に仕舞った。

「すみませーん、依頼完了したので報告と精算に来ましたー」

アキシスの村のノリで言つてみたが、ギルドの受付嬢の冷たいこと冷たいこと。

誰でしたっけ、と言わんばかりの目でこちらを睨^{にら}んできた。

今度からこのノリはやめようと決意しながら、ライルは自身のギルドカードとマズイの実、ついでに薬草とキノコを台の上に乗せる。

その瞬間周りの冒険者達がどよめいた。

「おいマジかよ。アイツ、マズイの実を三つも……!?!」

「今朝方依頼受けてなかったか……? いくらなんでも早すぎるだろ」

「嘘だろ、まだこの辺にマズイの実があるってことか……？」

「んなわけねえだろ。どうせどこかで買ったもんを持ってきたんだろ……！」

「そうだそうだが、俺だって昨日腐ってるのを一個見つけたくらいだ……」

「でもよ、そんなことして何の意味があんだよ。1万レスで買ったマズイの実を1000レスで提供するなんて、損かしねえじゃねえか」

「分からねえ。不正としか思えないが……証拠があるわけでもあるめえし」

受注時と同じく繰り上げられるひそひそ話にライルはまた眉をひそめる。今は気にするまいと受付嬢に視線を向ける。

マズイの実を見た受付嬢は少し驚いたように眉をあげ、ライルの顔を確認してから、冷たいながらも興味深そうに言った。

「運が、良かったのですね……、最近マズイの実を見ることが少なかったのですが……三つも」

「ええ、たまたまですよ」

腐った実を元にスキルを使って生成しただけなんだけれども、ライルは誤魔化すように笑みを浮かべ、報酬の銀貨三枚と、追加で銅貨十六枚をもらいギルドを出た。

マズイの実を持ってきたということで少しだけ他の冒険者達の視線が刺さった気がした。自意識過剰だろうか。



所持金は1万2780レスとなった。

奴隷の相場が分からないから何とも言えない。そりゃあ高い奴隷は買えないだろうが、安い奴隷なら買えるのではないだろうか。

ライルはどんな奴がいるのか情報を仕入れてやろうと、この街にある奴隷館に向かった。

奴隷館に着いたライルは、早々に刺々しい言葉とげとげを浴びせられてしまった。

「たったの1万レスしか持ってないだあ？ おめえここに飯でも食いに来たんじゃないやあねえだろうな」

恰幅かつぎくの良い男は表情を歪めながら目の前にいるライルに悪態をつく。

奴隷館にやってきたライルは個室に通された。だが揉み手胡麻こま搦りすりだった男は、ライルの所持金があったの1万レスであることを知った途端に態度を変えた。

そして、説教でもするかのようにふんぞり返り文句をたれ始めたのだ。

「全くアイツが来てからろくなことがねえぜ」

ぼやきながら紅茶をがぶがぶと飲む。ついでと言わんばかりに、ライルに用意されたはずの紅茶も奪い飲み干した。

「安い奴隷で良いんですが……」

「うちは安くても10万からだ」

吐き捨てるように告げた奴隷館の男だったが、ふと何か思いついたように前のめりになり、にやついた顔でライルに向かって言った。

「確か、採集スキルを持つてる奴なら誰でも良いんだったな」

何を突然にまにまど、と思ったライルだが、とりあえずそうだと頷く。

「だったらぴったりの奴がいるぞ。粗悪品で、廃棄しようかどうかと迷っていたが、そうするにも金がかかるんだ。特別に1万で譲ってやるよ」

偉そうに言っているが、粗悪品を1万もの金で売ろうとしているのだ。正直どんな奴かと心配になる。

極悪人だったらどうしようなんて思いながらも、体を左右に揺らしながらどかどかと歩く男のあとをついて行く。

「おら、コイツだ」

そこにいたのは、痩せ細り骨の形がくつきりと浮かび上がった少女だった。藁の上で力無く横たわり、辛うじて呼吸で体を揺らしている。ボロボロの貫頭衣姿だ。

「魔族……」

その少女は、人間と魔物の混血と言われる『魔族』だった。

肌は痣のように青白く、とても人間とは思えない。手入れなんて微塵もされていない白い頭髮は、

ぼさぼさと箒のように疎らに伸びている。

左額に生えた一本の角が特徴的で、彼女が魔族であることを示していた。

「そいつなら1万で譲ってやってもいい。それ以外なら最低でも10万からだ」

10万レス貯まるまで待つか、それとも今1万レスでこの子を買うか。

飢えて今にも死にかけている少女には、とてもじゃないが採集を手伝えるとは思えない。

ただ彼女に食事を与えて働けるようにすれば、1万レスと少しで済む。

「どうだ？ 買うのか？ 買わないのか？ 買わないのならそろそろコイツも殺すが……。つってもどうせ勝手に死ぬだろうがな」

この少女が殺される――。

平然と廃棄すると言っていたし、奴隷が殺されることなんてよくあることなのだろう。ライルもそれを理解している。

しかしいざその現状を目の当たりにすると、どうしても心が揺さぶられる。

「買います」

彼女を買ったところで奴隷商人が潤うだけなのだから、これは完全に自己満足だ。

だが自己満足で結構。自慰行為で結構。自分は多くを救えると思うほど自惚れていないし、力が無いことくらい自覚している。

そもそも多くを救うつもりなんて毛頭ない。でも目の前で困っている人がいたら、助けないと気

が済まなかった。

この少女はそれを望んでいないかもしれない。

だがそんなことは知らない。ライルが助きたいから助けるのだ。

「まあそもそも助けるのが目的ではなく、採集を手伝ってくれる反抗しない奴隷が欲しかっただけなんだけれどね……」

そう自嘲気味に苦笑しながら、奴隷の少女を買って奴隷館の外に出た。

まるで死体のようにぐったりとした少女を抱えて歩く一人の少年に、周囲の視線が注がれる。

気にするまいとライルはこれから拠点とする宿へ向かったのだった。



宿の一室、簡素なベッドと申し訳程度の収納スペースがあるだけの粗末な部屋で、ライルは少女を下ろして一息つく。

信じられないほど少女は軽く、自分が背負っていた鞆の方が重かったのではないかと思っってしまった。

「いやあ、視線が痛かったな……」

奴隷を抱えて宿にやってきたライルを見つめる視線はとても鋭く、皆一様に顔をしかめていた。

さて、とライルは鞆を開けて、小瓶をふたつと水筒、さらにお皿と匙さじを取り出す。

小瓶の中に入った黄色いペースト状の物を皿に移し、そこに水を注ぐ。

軽く混ぜ、水が黄色味を帯びてきたところに、もうひとつの小瓶に入った粉末状のものを入れる。

後は粉末が、ある程度黄色いペーストに溶けるまで混ぜる。

お湯ならばもっと早く溶けるのだが、今は急を要する。

仰向けに寝ている奴隷少女の upper body を起こし、少女の口を指を使って無理やり開く。

歯がギザギザだ。歯も磨みがいてあげなければと思いながらも、ギザギザの歯をこじ開け、口の中に

黄色い液体を匙を使って流し込む。

口の端から少量の液がこぼれているが気にしなかった。

「よし、とりあえず今はこれで良いか。起きたら何か食べさせてあげよう。確かワシヅルウサギの肉がまだ残っていたはず……肉、食べられるのかな」

そう心配しながら、出した道具を片付ける。

まず黄色いペーストの入った小瓶。これはナンカイケ草という薬草で、葉が黄色い。栄養を多く含んでおり、肉を食わずともこれだけ食っていれば生きていけると言われる薬草だ。

鞆に入れておいた薬草や山菜の内のひとつである。

もうひとつの白い粉末は、チョットダケというキノコを乾燥させて粉末状にすり潰したものだ。単体ではちよつとだけ甘酸っぱいキノコだが、他の薬草と一緒に摂取すると、薬効をちよつとだ

け上げる効果がある。

栄養失調だった少女にこれらを摂取させることで、少しは効果が望めるはずだ。

ライルは少女が起きる前に、少女の体を拭いてあげようと布に水を染み込ませる。

相変わずの肌の色だが、今は汚れをどうにかしてやらねばならない。

申し訳ないと思いつつ、少女の貫頭衣を脱がせ、濡らした布で体を拭いた。

見れば見るほどがりがりで、内臓があるのかと思わせるくらいに腹が凹んでいる。

栄養が足りないのと逆に腹が膨れると聞いたことがあるのだが、そうはなっていないようだ。

折れそうな腕や脚を優しく撫でるように拭いていく。

どうやら青白い肌は素のようだ。顔を拭き歯も磨いてやり、最後に自分用の服を少女に着せた。

その際に奴隷用の首輪——奴隷輪が目に留まり、何とも言えない気持ちになった。

「奴隷を買うつても精神的にしんどいな。やつぱり普通に友達作るべきだったかも……」

肺の空気を全て押し出すような嘆息が、静かな一人部屋に響いた。



あれから三日経ったが奴隷少女は起きていない。三日前よりも少しばかり顔色が良くなり、ほんのちよっぴり肉が付いてきたような気がする。

流石はナンカイケ草だ。ライルが病気の時に、母親がこれを飲ませてくれたが、驚く程に気力が湧いてきて、あつという間に完治したものだ。

「じゃあ行ってくるよ」

そう言っってベッドに寝かせた少女を見ながら部屋を出た。

本当ならば起きるまでは一緒にいてやりたいが、お金を稼がなければならない。ライルは足早にギルドへ向かった。

いつものようにクエストボードを見て、採集クエストを探す。しかし大体が討伐クエストだ。

討伐クエストの方が圧倒的に報酬が高いのだが、興味が湧かない。

本当にお金に困っているならやらないでもないが、採集クエストでも毎日やれば生活は可能だ。

そう思いながらヒヤク草とウルオイ草の納品クエストを手に取り、受付へ向かった。依頼を受注し、ギルドを出る。

受付の際に、周りの冒険者の噂話が耳に入ったのだが、どうやらここ最近、北の山にも魔物が現れ始めたらしい。弱い魔物だし冒険者が狩っているから、別段気にする必要も無いが。

あまり遭遇したくはないなと思いつつ、腰に携えた分不相応な剣を軽く握って安心感を得る。

森に着いたライルは、お目当てのヒヤク草とウルオイ草を探した。採集倉庫に入っている分では少し足りなかったのだ。

まずはヒヤク草。これは比較的どこにでも生えている類の草なので、わざわざ探しに行くという